

ラヴロフが歴史を作る：停戦はすべてインチキだった

——ワシントンのあからさまな背信と、ISIS - アルカーイダ支援を非難

【訳者注】今朝（9/25）の民放の番組「サンデー・モーニング」が、このシリアのニュースを取り上げ、例によって、複雑でわからないと言っていた。これはこの記事を読めばわかるように、2つのワシントンによる韜晦宣伝を前提としていることによる。一つは、アメリカが“穏健派”とか“反政府軍”とか言っている集団は、「架空の実体であり、アル・ヌスラ（アル・カーイダ）そのものと何ら変わりはない」（p.2）、つまり、そんな実体も区別も実は存在しないこと。もう一つは、アメリカがこれらテロリストと戦うふりをして、実は「ISISあるいはアル・ヌスラと緊密に協力しながら行動している」（p.2）こと、つまり彼らはすべて、米 - NATO の傭兵であること、ありていに言えば、アメリカ自身がテロリストだということである。恐れ多くてそれが言えないのなら、あるいはよく知らないのなら、アサドが一番悪いなどといい加減なことを言うべきではない。

この事実が、今度のアメリカによる、明らかに意図的な、シリア軍攻撃とテロリスト援護をきっかけに、ロシア側の要求による緊急国連安保理事会につなげた。もちろん、ロシアは初めからそんなことは知り尽くしていたが、根気よく何度も停戦協定を呼びかけ、そのつど裏切られてきた。それが今度の安保理で、ついにロシア側が公的にすべてを暴露し、外交の決裂を突きつけたという内容である。この前後の関連記事とともに、下の記事も参照していただきたい——<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160509.pdf>

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160512.pdf>

Joaquin Flores

Global Research, September 24, 2016



ロシア外相セルゲイ・ラヴロフが、国連安保理事会で、きょう、歴史を画する発言をし、“停戦合意”という名の一方的停戦は、今後、議題にはしないことにすると宣言した。彼はこの戦闘を通じて何度も繰り返された約束を、アメリカが公然と破り続けた山ほどの事実的証拠に、巧みに言及した。

発言は、停戦合意への違反そのものを主要点として、最近の停戦の公的にリークされた“秘密文書”の一部を指摘し、これは、アメリカが、多くのこれまでの停戦にサインした、多くの集団を統率できないことの証拠だと彼は言った。そこにはもちろん、アメリカが穏健派だと主張するが、停戦にはサインしなかった集団が含まれ、彼らはともに、ISIS あるいはジャバト・アル・ヌスラと緊密に協力しながら行動している。ロシアは、これらの集団のいくつかは架空の実体であり、アル・ヌスラ（前称レバントのアルカーイダ）そのものと何ら変わりはないことを巧みに指摘した。

当然ここで無視できないコンテキストは、停戦を破ったアメリカが、ISIS と一緒になって **Deir ez-Zor** のシリア・アラブ軍陣地を攻撃したことである。この攻撃は長く続けられ、1時間にも及んだ——衝突回避の合意に基づいて存在していた、ロシアからの共同ホットラインの呼びかけにもかかわらず。

他にもこれを明確にする状況があり、その一つは、数日前の夜の、国連安保理緊急事態会議での米務省の応答で、特に代表者（サマンサ）パワーの、鉄面皮な、非外交的な振舞いと発言、それに続く、その数日後の赤十字援助物資輸送団への攻撃を、ロシアの仕業にしようとするアメリカの試みだった。これは時間がたつにつれ、アル・ヌスラ地上軍か、扇動的な方法を用いるアメリカの猛禽的ドローン攻撃によるものと思われる。

アナリストや活動家は、ずっと前から、停戦合意の有効性を論じてきた。しばしば、時には熱烈に言われてきたことは、停戦は、一方的にロシアによって守られ、アメリカに支援されたテロリスト集団に——“穏健派”の旗の下に組織されていようと、いなかろうと——軍備と態勢を立て直す時間を与えるだけの結果に終わったことだった。救援物資輸送団は、ずっと前から、裏口から必要な基本物資——兵器修繕のためのナット、ボルト、ワイヤの類や、弾薬や新兵器をさえ——運び込むのに用いられていた。長く記録され証明されていることは、最初、傷ついた市民のためと言っていたものが、最後には、アレッポの占領地域内のテロリスト集団によって使われていることである。



今、この一幕が片付いて、こうした事情を、ロシアは最初からずっと、正確に明瞭に知っていたことが明らかになった。必要とされたのは口実、つまり安保理事会や国際社会でコンセンサスをつくり出すための、ロシアとその同盟国に与えられる証拠、“我々は停戦を試みた——が、こういうことになった”という有無を言わさぬ証拠だった。

これは、よく知られた、あの最後の段階の“背負い投げ”の足場作りとなり、アメリカの外交政策と、メディアの口移し宣伝を、ロシアの熊の背に乗せて一気に裏返しにするものだった。

一つの節目が画された。我々は読者に、ツイッターを用いた、下の Navsteva の数分のクリップを見ていただきたい。これはもっと長いロシアのプレゼンテーションと、きょうの歴史的な安保理事会の、真実のハイライトである。

現在、全面戦争の可能性が頭上を覆い、我々は実に興味ある、危険でいっぱい時代に生きている。我々は読者が、出来事がエスカレートしていく間、特に眼を開いて、我々の重要な使命と仕事を手伝ってくださり、これらの論文をあなたの社会的ネットワークを通じて、共有して下さるようお願いする。

<https://youtu.be/T9Q3a4EnafI>

(ラヴロフとケリーが、シリアに関する国連安保理事会で、アレッポの支援物資輸送者攻撃について衝突)